

安全基地スクリプト法による愛着表象測定：予備的報告

広島国際大学心理科学部
工藤 晋平

School of Human Ecology, University of Texas at Austin
梅村 比丘

Measuring attachment representations with secure base scripts: A preliminary report.

Shinpei Kudo, Tomotaka Umemura

Faculty of Psychological Science, Hiroshima International University
School of Human Ecology, University of Texas at Austin

愛着に基づいた臨床的介入において個人の愛着状態の把握は欠かせない。本研究では Waters & Waters (2006) による安全基地に関するスクリプトを捉える測定法 (NaS 法) の日本での適用について、臨床的な観点から攻撃性の要素を含めた版 (NaSA 法) も作成しながら検討を行なった。大学生 19 名を対象に調査を実施した結果、NaS 法、NaSA 法の評定者間信頼性や内部相関などはある程度確認された。しかし愛着表象測定の質問紙である RQ や ECR とは NaSA 法のみが理論的に予想される関連を示し、対人葛藤解決方略との関係でも強制方略と負の相関を示すなど、攻撃性の要素を含めた NaSA 法の適用可能性が示唆された。しかし、物語の量が全体に少ない、物語同士の関連の低いものがある、などの問題点も見いだされ、AAI を用いての妥当性の検討も含め、今後の検討も必要であると考えられた。

Key words : 安全基地スクリプト, 日本版, 攻撃性, 対人葛藤解決方略

問題と目的

愛着研究は、近年、かつて Bowlby がそう願ったように乳幼児および成人への臨床心理学的援助に活かされるようになっており (e.g., Wallin, 2007; 中尾・工藤, 2007), そこでは臨床的介入に先立って個人の愛着に関する心の状態を捉えることが重視されている (e.g., Oppenheim & Goldsmith, 2007; Steele & Steele, 2008)。とりわけ成人においては表象水準での愛着の状態が目されているが、本研究の目的はこうした愛着表象の測定法として Waters & Waters (2006) に注目し、日本の大学生を対象に行なっている研究の予備的な報告を行ない、その臨床適用の可能性を探ることである。

1. 乳幼児の愛着表象測定と「物語」

これまで愛着研究の主要な領域は発達心理学にあっ

た。それは歴史的な意味合いもさることながら、ストレンジ・シチュエーション法 (SSP) と呼ばれる実験室観察法による愛着パターン分類が可能となったという実際の面が大きく影響してのことである。実験室における分離と再開の一連の手続きに見られる乳幼児の行動水準の個人差が日常の養育者との関係を反映していることが示され (Ainsworth et al., 1978), この測定法によって「愛着」は研究の対象となったのである。

しかし、1980 年代に入ると研究対象はより行動レパートリーに広がりのある就学前児を含むようになり、そのために愛着行動から愛着の状態を捉えるのでは間に合わない状況が生まれてきた。乳幼児が経験する日常的な養育者との相互作用には、ストレスへの遭遇—愛着行動—養育者による応答—回復というサイクルが幾度となく現れ、こうした相互作用は記憶やスキーマといった認知的要素として、あるいは生物学的神経学

的なシステムとして乳幼児の中に内在化される (Goldberg, 2000)。行動レポトリの広がった子どもの愛着の状態を捉えるためには、この内在化された水準に基礎をおいた測定法の開発が進められた。

それが分離不安テスト (Hansburg, 1972; Klagsbrun & Bowlby, 1976) を始めとした「物語」作成に基づく方法であった (Kaplan, 1987; George & Solomon, 1990/1996/2000)。標準的な方法は人形や写真を用いた場面構成を行ない、親子間の分離や葛藤の場面に続いて、どのように子どもが物語を作るか、その時の行動や相互作用はどのようなものか、を分析するものだが、幼児の中に構築された愛着に関する心的表象が物語内容とそれを語ることを通して捉えうることが見いだされていったのである。

2. 成人の愛着表象とその測定

子どもの愛着表象測定と並行して、成人の愛着表象測定に関しても研究が進められた。その代表的なものが Main et al.(1985)による成人愛着面接 (AAI: Adult Attachment Interview) である。これは半構造化面接から得られた幼少期の養育者との関係に関する語りについて、愛着関係を必要十分なだけ具体的に、一貫性を持って語れるかを評定することで、成人の愛着表象を捉えるものである。これによる親の愛着分類とその親の子どもの SSP 分類とはよく一致し、長期縦断研究における幼少期から成人期への愛着分類の一致も示されている (Hesse, 2008)。従来からの研究対象であった乳幼児の愛着の状態との対応、Main らが「臨床的」と呼ぶ面接の設定、語りの形式に注目して潜在的な愛着に関する心の状態を把握する方法論、によって、AAI は臨床的に最も有用な愛着表象測定ツールとなっている (Hesse, 2008; Steele & Steele, 2008)。注目されるのはここでも、個人の語りの中に愛着に関する心の状態が反映されることが示されていることである。

ところで同時期に社会心理学の領域においても、Ainsworth らの乳幼児の愛着分類に基づいた質問紙による成人の愛着スタイル測定が行われている (Hazan & Shaver, 1987)。彼女らの方法は愛着のスタイルを表す 3 パターンの記述から最もよく自分に当てはまるものを選択させる強制選択法であり、ここには物語の要

素は含まれていない。後にこれを基にいくつかの多項目式の尺度が開発され、現在では、成人の愛着の状態は ECR と呼ばれる質問紙などのように「親密な関係からの回避」と「親密な関係についての不安」の 2 次元によって構成されると考えられている (Brennan et al., 1998)。Bartholomew & Horowitz(1991)もこれと類似した分類を提案しており、社会・人格心理学では、愛着の状態を構成する 2 次元とそれによって分類される 4 つの愛着の状態を、質問紙によって捉えてきた。

3. 安全基地スクリプト

こうした愛着表象測定の状態について Waters, Rodrigues & Ridgeway(1998), Waters & Waters(2006) は、内的作業モデルと呼ばれているこれらの内在化された愛着の状態が、お互いに異なる水準で捉えられていることに触れ、愛着の状態を規定する中核的な構成概念として「安全基地スクリプト」を提示した。乳幼児が日常的な養育者との相互作用の中で繰り返すサイクルは、ストレス下での養育者への接近、応答的な養育者による安全と慰撫の提供、回復と外界への探索とを含んでいる。Ainsworth らはここでの母親の機能を、乳幼児がそこに戻り、またそこから出て行く「安全基地」であるとしたが、Waters らが定めたのはこの安全基地の提供と利用に関する一連の相互作用が内在化された、時系列的な知識構造の内実である (表 1)。幼児の物語作成の再分析を行なう中で、この認知的要素によって個人の愛着の状態が捉えられることを示した上で、これを愛着表象測定の中核においたのである。

彼女らはその後、成人の安全基地スクリプトを測定するための「成人愛着表象の語りによるアセスメント法」を構築した (以下これを NaS 法: Narrative assessment of Secure base 法と呼ぶ)¹⁾。それは、6 つの刺激語群からなっており、中性刺激語群を除いた 4 つのうち 2 つは母親と子どもを含んだ刺激語群で、あとの 2 つは大人同士の刺激語群である (表 2)。それぞれの刺激語群は 12 単語からなり、その単語を用いて「物語」を作ってもらおうというのがこの測定法の課題である。最初の数語は状況と登場人物を表し、次の数語は安全基地に関する相互作用に関わり、最後の数語は物語の結末を示唆している。タイトルも付され、

物語作成の手助けとなる。Watersらが狙っているのは、その刺激語群によって個人の安全基地スクリプトへのアクセスが生じ、それが物語の構成の中に表現されることであり、刺激語やタイトルはそのための枠組みである。作り手はそれをどのような順番で用いても良く、

また語尾を変えたり、似た言葉に置き換えたり、場合によっては使用しないこともできる。ただし、できるだけ安全基地スクリプトへのアクセスが生じるよう、物語はA4 1枚程度の長さになるよう教示される。自発的な内容と組織化を得るために、物語は口頭で語ら

表1 安全基地スクリプトの鍵要素 (Waters & Waters, 2006より)

1. 子ども(乳児)と母親(あるいは2人の大人の愛着パートナー)が建設的に何かをしている
2. 2人は出来事や他の人物によって妨害される。乳児(あるいは大人の1人)は苦痛を感じる
3. 助けを求める努力がある
4. 助けを求める努力が関知され助けが提供される
5. 助けの提供が受け入れられる
6. 助けは困難を乗り越えるのに効果的
7. 助けはまた効果的な慰めや情動制御を含んでいる
8. 2人は建設的な相互作用に戻る(あるいは始める)

表2 NaS法刺激語群 (Waters & Waters, 2006より)

母子	A. Baby's Morning			B. Doctor's Office		
	mother	hug	teddy bear	Tommy	hurry	mother
	baby	smile	lost	bike	doctor	toy
	play	story	found	hurt	cry	stop
	blanket	pretend	nap	mother	shot	hold
大人同士	C. Jane and Bob's Camping Trip			D. Sue's Accident		
	Jane	tent	campfire	Sue	wait	home
	Bob	wind	shadow	road	Mike	dinner
	bags	collapse	sounds	accident	tears	bed
	hurry	upset	hug	hospital	doctor	hug
中性	E. Trip to the Park			F. Afternoon Shopping		
	Susie	swings	tired	Emily	browse	hungry
	bike	sandbox	bench	car	buy	food
	park	game	comics	moll	money	talk
	friend	run	coke	friend	gift	home

表3 評定基準 (Waters & Watersによる未刊行のマニュアルより)

7. 最も良い安全基地の例。2人の主役の間に豊かな相互作用。他方の心理学的状態への多大な注意があり、安全基地がその心理学的状態に非常に応答的。正常への回復を伴った問題/苦痛の解決。
6. 7に明らかな安全基地の豊かさが足りない。それでも相当量の安全基地の内容を含んでいる。
5. 中程度の量の安全基地の内容。しかし7や6ほど精緻化されていない。
4. 安全基地の内容があるが、多くはない。それは弱いものの、奇妙な内容は含んでいない。
3. ほとんど出来事関連の物語で、起きたことが提示されている。登場人物間のギブアンドテイクや心理学的内容への言及が少ない。
2. 同様に出来事関連の物語だが、ばらばらに見えるほど簡単。また安全基地スクリプトに一致しない奇妙な内容をいくらか含んでいる。しかしそれは1ほど一貫しておらず全面的でもない。
1. 暗示された物語の流れについての非常に奇妙な解釈に至る、テーマのある変形。安全基地スクリプトが認められないだけでなく、全く異なったスクリプト。物語の流れの奇妙な解釈を伴った、非常に詳細な内容。これらはそれほど一般的ではない。重要な奇妙な内容があるが、完全なテーマのある変形。

れ、録音される。考える時間は2分であるが、時間を長く取ることも許容される。一般に150-300単語の物語が作られ、それは、安全基地スクリプトに沿った物語となっているか、その内容は精緻なものであるかという観点から、7段階で評定される(表3)。

Waters & Waters(2006)によれば、AAIの中心的な尺度の1つは「心の一貫性」と名付けられた、愛着に関する一貫性のある語りを組織化できる心の状態にあるかを捉える指標であるが、NaS法の評定はこれと.50-.60の相関を示したという。さらに安全基地スクリプトの存在を示す4点を基準に養育者を2分すると、母親のNaS法の評定はその子どものSSPにおけるsecure-insecureの分類との一致を示し、その一致率はAAIとの一致率のメタ分析結果と同程度であったという。青年版のNaS法を作成したDykas et al.(2006)によれば、NaS法の評定は、質問紙法のECRの不安と回避の次元それぞれと-.30程度の相関を示している。

語りの形式に注目するAAIに比べれば、NaS法は評定が容易で、したがって1人分の記録を短時間で評定することができる、実施も容易で、語りの量も少ないため逐語録の作成が短時間で終わる、などの利点もあり、これをAAIに代えて用いることができれば臨床場面における愛着理論の適用は今よりもはるかに素早く行なえるようになるだろう。

4. 攻撃性と安全基地

ところで、安全基地である養育者に応答性が認められない時、乳幼児に怒りが引き起こされることはしばしば観察されることである。Bowlby(1973)はこうした怒りは障害を克服し、養育者の再度の分離を思いとどまらせる機能を有するとして、これを希望の怒りと呼んだ。しかしこれが機能不全を来すと絶望の怒りに変わるとも言い、乳幼児研究の示すところでは、親の脅しなどの威圧的な養育態度とともに養育者と乳幼児の間に無秩序な愛着関係があると、子どもは攻撃的な行動を発達させるという(Lyons-Ruth, 1996)。Fonagy(2003)もまた攻撃的な行動が生後2年目の幼児に最も見られるという知見に注目し、学習されるのは攻撃的な行動ではなく、むしろその制御であり、それは愛着の文脈の下で行われるとした。怒り、攻撃、衝

動性の制御不全は境界性人格障害の発達に寄与し、それはまた成人期における親密な関係での暴力や攻撃性にも結びつく(Dutton, 2002)。Duttonは親密な関係における暴力のサイクルを緊張の高まり-暴力-悔恨の連鎖としてモデル化しているが、それはストレス下で重要な対象に向けられるアンビバレンスや暴力、攻撃性が親密な関係内部において制御不全であることに端を発するのである。

こうした文脈において、安全基地をめぐる問題は攻撃性の問題と結びつくことになる。親密な関係の文脈の中で攻撃性を含んだ相互作用が機能的なものであるか、機能不全のものであるかは、個人の、あるいは親密な関係の発展において決定的に重要なものであり、したがってWatersらのNaS法に攻撃性の要素を組み込むことは臨床適用の可能性を高めるうえで意義のあることだろう。本研究の目的は、こうした考えのもと、NaS法の日本語版を作成し、同時に攻撃性の要素を組み込んだ版をも作成し、既存の測定法や関連する尺度との関連を検討し、もってその臨床適用の可能性について論じることである。

方法

調査協力者：現在進行中の研究の中から今回の研究目的に沿ったデータを持った、227名の大学生(男性134名、女性93名)のデータを用いる(平均年齢=20.3歳、SD=1.15)。このうち19名(男性10名、女性9名)がNaS法を含んだ個別調査に参加した。参加群-非参加群間で各変数についてt検定を行なったところ、有意な差は見られなかった(表6, 7, 8)。

調査時期：2008年10月-11月。

調査用具：

- ・フェイスシート

年齢、性別の他に、婚姻・恋愛関係の有無(あてはまる人はその継続期間)を尋ねた。

- ・NaS法

以下のようにして日本語版を作成した。

表2の刺激語群を翻訳し、Waters & Waters(2006)およびDykas et al.(2006)にならって刺激語群を提示する用紙を印刷し、予備調査を行い、作成された物語を英

語の物語と比べた。異なる用い方をされている単語がないかを確かめ、最終的に刺激語群を表4の通りに決定した²⁾。評定については、マニュアル(非公開)に則ったが、研究に先立って第一著者およびもう1人の評定者が、Watersらの指導を受け彼女らの研究にも携わった第二著者から評定法を学んだ。教示はWaters & Waters(2006)に基づき、既述の通りタイトルおよび刺激語群をガイドとして用いてA4 1枚程度の長さの物語を作成してもらうこととした。

・攻撃性を組み込んだNaS法 (NaSA法 : Narrative assessment of Secure base and Aggression)

安全基地スクリプトを内在化した個人であればNaS法と同等の流れの物語になることを意識しながら、肯定的な刺激語を攻撃性を示す刺激語に置き換えた。他の刺激語は変更しなかった³⁾。「スーの事故」では一方が事故に遭って意識が戻らない物語になることもあるため、それでは攻撃の相互作用が成り立たないことが考えられ、新規に刺激語群を作成した(表5)。

・Relationship Questionnaire (RQ)

Bartholomew & Horowitz(1991)による強制選択式の愛着スタイル測定尺度の日本語版(加藤, 1998)。4つの愛着スタイルを表す記述を読み、それぞれが自分にどの程度当てはまるかを7件法で評定し(愛着スタイル得点)、どれが最も自分に当てはまるかを選択してもらう(愛着スタイル)。恋愛関係での愛着スタイルの記述と一般他者との関係の記述の2種類を用意した(それぞれRQ-R; RQ-romantic, RQ-GO; RQ-general other)。

・Experience in Close Relationship (ECR)

Brennan et al.(1998)による多項目の愛着スタイル測定尺度の日本語版(中尾・加藤, 2004)。「関係からの回避」と「関係への不安」の2次元からなる。7件法, 26項目。

・Handling of Interpersonal Conflict Inventory (HICI)

加藤(2003)によって作成された対人関係における葛藤解決方略の測定尺度。「統合」「回避」「強制」「自

表4 NaS法刺激語群日本語版

母子	A. 赤ちゃんの朝 母親 赤ちゃん 遊ぶ 毛布	だきしめる 笑う 物語 ふり	ぬいぐるみ なくす 見つけた 居眠り	B. 病院 トミー(男の子) 自転車 けが 母親	急ぐ 医者 泣く 注射	母親 おもちゃ 止まる 抱く
大人同士	C. ジェーンとボブのキャンプ旅行 ジェーン(女性) ボブ バッグ 急ぐ	テント(男性) 風 崩れる 動揺する	キャンプファイア 影 音 だきしめる	D. スーの事故 スー(女性) 道路 事故 病院	待つ マイク(男性) 涙 医者	家 夕食 ベッド だきしめる
中性	E. 公園 スージー(女の子) 自転車 公園 友達	ブランコ 砂場 ゲーム 走る	疲れた ベンチ 漫画 コーラ	F. 午後の買い物 エミリー(女性) 車 ショッピングモール 友達	見て回る 買う お金 贈り物	空腹 食べ物 話す 家

表5 NaSA法刺激語群日本語版(中性刺激語群を除く)

母子	A. 赤ちゃんの朝 母親 赤ちゃん 叩く 毛布	だきしめる 泣く 物語 蹴る	ぬいぐるみ なくす 見つけた 居眠り	B. 病院 トミー(男の子) 自転車 けが 怒る	急ぐ 医者 泣く 注射	母親 おもちゃ 止まる 抱く
大人同士	C. ジェーンとボブのキャンプ旅行 ジェーン(女性) ボブ バッグ 急ぐ	テント(男性) 風 崩れる 動揺する	キャンプファイア 影 責める だきしめる	D. 夕食の時間 メアリー(女性) 言い訳 遅れ 抑える	待つ ジャック(男性) 怒り 友達	家 夕食 テーブル だきしめる

己譲歩」「相互妥協」の5因子からなり、このうち「強制」が攻撃的な方略を示しており、NaSA法との関連が予測される。4件法、20項目。

原版は対人関係に友人関係を設定していたが、ここでは研究の目的に合わせて親密な関係を設定した。直近の葛藤を挙げてもらい、相手、葛藤のあった時期、内容を記入してもらった後で、各項目に回答してもらった。信頼性を検討したところ、「相互妥協」の信頼性が低かったため1項目を削除して使用した。

手続き：愛着と親密な関係での葛藤解決方略の関連を検討する研究の一部として、HICI, RQ-R, RQ-GOの配布を行なうとともに、個別調査の依頼を行った。調査協力の意思を示した19名にNaS法, NaSA法, およびECRを実施した。実施に要した時間はおおよそ45分ほどであった。調査実施の際には、個人情報の保護を行なうこと、協力は任意であることを説明した。個別調査終了後、謝礼として1000円分の金券を渡した。

表6 性別の分布

		性別		合計
		男性	女性	
非実施者	度数	131	88	219
	%	59.8%	40.2%	100%
実施者	度数	10	9	19
	%	52.6%	47.4%	100%
合計	度数	141	97	238
	%	59.2%	40.8%	100%

$\chi^2 = .37$ n. s.

表7 愛着スタイルの分布

		恋愛愛着スタイル				合計
		安定型	拒絶型	とらわれ型	恐れ型	
恋愛愛着 非実施者	度数	46	20	78	51	195
	%	23.6%	10.3%	40.0%	26.2%	100%
実施者	度数	5	2	7	5	19
	%	26.3%	10.5%	36.8%	26.3%	100%
合計	度数	51	22	85	56	214
	%	23.8%	10.3%	39.7%	26.2%	100%
一般愛着 非実施者	度数	30	41	75	59	205
	%	14.6%	20.0%	36.6%	28.8%	100%
実施者	度数	3	2	11	3	19
	%	15.8%	10.5%	57.9%	15.8%	100%
合計	度数	33	43	86	62	224
	%	14.7%	19.2%	38.4%	27.7%	100%

$\chi^2 = .10$ n. s.

$\chi^2 = 3.95$ n. s.

結果

1. NaS法, NaSA法の評定者間信頼性

第一著者と、他の尺度について未知の評定者による評定について、完全一致率が50%、1点以内の一致率が95%であった。これまで完全一致率についてのデータはないが、Dykas et al.(2006)では2点以内の一致率が96%であったのに比べると十分な値である。それぞれの物語について評定者間の相関係数を求めると.54-.80の範囲で、平均は.70であった。Coppola(2006)やDykas et al.(2006)、Vaughn et al.(2006)の.60-.90に比べるとやや低い値であった。

不一致であったものについては、協議の上で評定を決め、WatersらにならないNaS法, NaSA法それぞれについて4つの物語の評定を平均して全体評定を算出した。

2. 記述統計

RQ-RおよびRQ-GOによる愛着スタイルの分布、および他の関連する変数の記述統計量を表6-8にまとめた。RQ-Rにおける愛着スタイルの分布は日本の他の研究の比率とほぼ同一であったが、RQ-GOでは先行研究に比べ、拒絶型が多かった。

NaS法, およびNaSA法の文字数は平均204.3文字(76.7-387.7, 中央値187)で、単純に比較はできないものの、Waters & Waters(2006)が典型的な逐語録では150-300単語になると報告しているのに比べると、少ないと言える。また、これらの得点に関しても(表9)、

平均が3.5点前後、中央値および最頻値もほとんどが3点代であった。最低限の愛着の物語が見られる4点代を下回っていたが、高校2年生を対象としたDykas et al.(2006)では同様の値が示されている。

Waters & Waters(2006)にならい、信頼性を算出するとNaS法で $\alpha = .74$ 、NaSA法で $\alpha = .64$ であった。なお、後述する通りNaSA法の「夕食の時間」の物語は他と

の相関が低く、これを除いて算出すると $\alpha = .71$ となった。

3. NaS法およびNaSA法の内部相関

NaS法およびNaSA法の各物語の評定および全体評定について、それぞれの関連を見るため相関分析を行った(表10)。NaS法における母子の物語同士(「赤

表8 各変数の平均値

	NaS, NaSA実施者 (N=19)			NaS, NaSA非実施者 (N=218)			
	N	平均値	標準偏差	N	平均値	標準偏差	
年齢	19	20.1	1.10	218	20.3	1.09	
HICI	統合	16	8.8	3.45	162	9.3	3.39
	回避	17	9.2	4.05	163	9.6	3.25
	強制	17	9.0	4.00	164	9.2	3.48
	自己譲歩	17	10.1	4.18	161	8.7	3.20
RQ-R	相互妥協	17	6.3	2.23	163	6.6	2.17
	安定型得点	19	3.4	1.81	204	3.0	1.63
	拒絶型得点	19	2.5	1.90	204	2.4	1.62
	とらわれ型得点	19	3.7	2.06	204	3.6	1.87
RQ-GO	恐れ型得点	19	3.0	2.00	202	3.1	1.89
	安定型得点	19	3.4	2.01	207	3.0	1.67
	拒絶型得点	19	2.9	1.88	207	2.9	1.68
	とらわれ型得点	19	4.2	1.68	207	3.6	1.75
	恐れ型得点	19	3.4	1.61	208	3.3	1.86

※ NaS, NaSA実施の有無による差異はいずれも有意でない

※ HICIに関しては葛藤の報告がない調査協力者がいたためNが小さい

表9 NaS法, NaSA法の各物語の記述統計

	中性		NaS					NaSA				
	公園	買い物	朝	病院	キャンプ	事故	全体	朝	病院	キャンプ	夕食	全体
平均値	2.91	2.94	3.53	3.84	3.41	3.69	3.62	3.22	3.13	3.22	3.03	3.15
標準偏差	0.20	0.17	1.28	0.51	0.82	0.89	0.69	1.06	0.65	0.97	0.59	0.58
中央値	3	3	3.75	3.75	3.5	3.75	3.63	3.25	3	3.25	3	3.06
最頻値	3	3	4	3.5	3.5	3.54	3.63	3.5	2.5	2.5	3	3.0
						4				3.5		3.1
												3.4
最小値	2.5	2.5	1	3	2	2	2.25	2	2.5	1.5	2	2.25
最大値	3	3	6	5	5	5	4.88	6	4.5	5	4.5	4.63

表10 NaS法, NaSA法の内部相関

	中性		NaS					NaSA				
	公園	買い物	朝	病院	キャンプ	事故	全体	朝	病院	キャンプ	夕食	
中性												
NaS	買い物	0.30										
	朝	-0.31	0.09									
	病院	-0.32	0.26	0.47 +								
	キャンプ	-0.16	-0.16	0.65 **	0.24							
	事故	0.10	0.19	0.58 *	0.22	0.32						
	全体	-0.22	0.10	0.94 ***	0.55 *	0.75 ***	0.73 **					
NaSA	朝	-0.36	-0.19	0.52 *	0.41	0.20	0.39	0.50 *				
	病院	-0.29	-0.08	0.44 +	0.11	0.15	0.39	0.40	0.64 **			
	キャンプ	-0.32	-0.01	0.53 *	0.52 *	0.32	0.03	0.45 +	0.49 +	0.27		
	夕食	0.03	0.35	0.17	-0.26	-0.10	-0.08	-0.02	0.07	0.16	0.13	
	全体	-0.37	-0.03	0.62 **	0.37	0.24	0.28	0.52 *	0.85 ***	0.72 **	0.75 ***	0.39

ちゃんの朝」「病院）」には中程度の正の相関があったものの、大人の物語同士（「ジェーンとボブのキャンプ旅行」「スーの事故）」には有意な相関が見られなかった。「朝」の物語はNaS法内の他の物語いずれとも中程度の相関を示しており（ $r=.47-.65$ ）、全体評定とも最も高い、きわめて強い相関を示した（ $r=.94$ ）。また、他の物語もそれぞれに全体評定との相関は有意であった。

NaSA法における傾向も同様で、母子の物語同士（「赤ちゃんの朝」「病院）」には中程度の正の相関があったものの、大人の物語同士（「ジェーンとボブのキャンプ旅行」「夕食の時間）」には有意な相関が見られなかった。特に、「夕食」の物語は他の物語とも、全体評定とも有意な相関を示さなかった。ここでも「朝」は「夕食」を除く他の物語と中程度の相関を示し（ $r=.49-.64$ ）、全体評定とも非常に強い正の相関を示した（ $r=.85$ ）。他の物語はそれぞれとの相関は有意でないものの、全体評定との相関は有意であった。

NaS法とNaSA法の間では「朝」に有意な中程度の正の相関（ $r=.52$ ）が見られ、NaS法における「朝」はNaSA法の「夕食」を除く他の物語や全体評定とも中程度の相関を示した（ $r=.44-.62$ ）。NaS法における全体評定はNaSA法の「夕食」を除く各物語とも中程度の正の相関を示している（ $r=.40-.52$ ）。他方、NaSA法における「朝」や全体評定は、NaS法の他の物語とは数値上中程度の正の相関ではあるものの統計的に有意ではなかった。

4. 愛着スタイルおよび対人葛藤解決方略との関連

今回得られた愛着の尺度（RQ）とHICIとの関連についてはすでに他のところ（Kudo, 2009）でまとめたため、ここではNaS法およびNaSA法との関連を検討する。NaS法、NaSA法と他の尺度との相関を表11に示す。

NaS法において、「事故」を除くすべての物語がRQ-Rの「安定型」得点と中程度の負の相関を示した（ $r=-.43-.47$ ）。全体評定も $r=-.39$ と有意ではないものの中程度の相関の値を取り、NaS法による安全基地スクリプト得点が高いほど恋愛における安定型得点が低くなるという結果となった。また、有意検定で有意

表11 NaS法およびNaSA法と愛着、対人葛藤方略との相関

		愛着				一般				HICI					
		安定	拒絶	とらわれ	恐れ	安定	拒絶	とらわれ	恐れ	不安	統合	回避	強制	自己談歩	相互妥協
中性	公園	-0.03	-0.23	-0.04	0.18	-0.01	0.02	-0.16	0.18	0.26	0.05	0.07	0.12	0.07	0.05
	買い物	-0.20	-0.01	0.00	0.01	-0.17	0.25	-0.20	0.41	0.20	0.02	0.33	0.23	-0.19	0.21
NaS	朝	-0.43 +	-0.06	0.24	0.21	-0.06	-0.04	0.28	0.14	-0.24	0.30	0.30	-0.30	-0.14	0.05
	病院	-0.43 +	-0.10	0.49 +	-0.41	-0.25	-0.07	0.34	-0.31	-0.17	0.42	-0.13	0.21	-0.08	0.06
	キャンプ	-0.47 +	0.39	-0.08	0.08	0.00	0.25	0.06	0.04	-0.02	0.06	-0.24	-0.04	-0.13	-0.15
	事故	0.07	-0.32	0.27	-0.01	0.08	-0.03	0.30	0.19	-0.51 *	0.14	0.26	-0.20	-0.01	0.06
NaSA	全体	-0.39	-0.03	0.27	0.05	-0.05	0.04	0.31	0.08	-0.32	0.28	0.13	-0.18	-0.12	0.01
	朝	0.12	-0.37	0.25	-0.42	0.19	-0.43 +	0.42 +	-0.34	-0.77 ***	0.33	0.00	-0.47 +	0.24	0.06
	病院	0.13	-0.26	0.16	-0.23	-0.01	-0.36	0.42	-0.16	-0.44 +	0.38	0.11	-0.58 *	0.36	0.23
	キャンプ	-0.43	-0.14	0.34	-0.18	-0.34	-0.47 +	0.40	-0.39	-0.27	0.48 +	0.07	-0.09	-0.06	0.36
全体	夕食	0.26	-0.19	-0.04	0.05	0.23	-0.19	0.00	0.16	0.12	0.03	0.26	0.60 *	-0.03	0.24
	全体	-0.02	-0.35	0.29	-0.32	0.00	-0.54 *	0.48 +	-0.32	-0.56 *	0.46 +	0.13	-0.47 +	-0.18	0.30

ではないものも含まれるものの、数値上「キャンプ」はRQ-Rの「拒絶型」得点と、それ以外の物語と全体評定は「とらわれ型」得点と、それぞれ正の相関を示し、この相関の方向性はRQ-GOでも同様であった。

他方、NaSA法においてはいずれも有意ではないものの、「夕食」の物語を除いて「拒絶型」「恐れ型」得点とは負の値を、「とらわれ型」得点とは正の値を取っていた。この傾向はRQ-GOにおいてより顕著となり、「夕食」の物語を除くすべての物語と全体評定は「拒絶型」得点と中程度の負の相関 ($r=-.36-.54$)、「とらわれ型」得点と中程度の正の相関 ($r=.40-.48$)を示した。「安定型」得点に関しては、RQ-R、RQ-GOいずれにおいても「キャンプ」だけが負の相関を示したが、それも有意ではなく、他の物語は小さな相関係数しか取らなかった。

Dykas et al.(2006)にならい、ECRの2次元との相関を見ると、NaS法においてもNaSA法においても「回避」次元とは負の相関、「不安」次元とは正の相関が見られた。この傾向はNaSA法において顕著であり、その全体評定は「回避」と有意な中程度の負の相関 ($r=-.56$)、「不安」と有意な中程度の正の相関 ($r=.46$)を示した。

最後にHICIとの相関を見ると、NaS法との間にはほとんど有意な相関がなく、唯一「キャンプ」の物語と「統合」方略との相関が有意であった。しかしそれは $r=-.50$ と、理論的に予想されるのは逆の相関であった。これと比べると、NaSA法では「朝」「病院」および全体評定と「強制」方略との間に理論的に予想される方向の相関が示された ($r=-.47-.58$)。これらの値は「強制」との関連が予想されるRQの不安定型愛着スタイル(「拒絶型」「とらわれ型」「恐れ型」)得点や、ECRの2次元との相関よりも高い値であった ($r=.00-.25$)。ECRの「不安」次元のみ $r=.40$)。また、「病院」「夕食」および全体評定は「回避」方略と中程度の正の相関を示し ($r=.43-.60$)、この値もRQの各愛着スタイル得点が示すものより高い値であった ($r=.00-.25$)。

なお、NaSA法において内部相関の検討で他の物語の評定と相関がなかった「夕食」の物語を除いて全体評定を算出し再度分析を行なったが、結果はほとんど

変わらなかった。

考察

本研究の目的はNaS法、およびNaSA法の日本人大学生への適用に関する予備的な報告を行ない、その臨床適用について考えることであった。以下、これについて考察していく。

1. 安全基地スクリプトの測定について

結果からは、刺激語群によって作成される各物語の評定からなるNaS法、NaSA法を1つの尺度として考えた際の信頼性は一定の値を示したものの、内部相関についてはNaS法、NaSA法ともに低かった。その中で「赤ちゃんの朝」はNaS法、NaSA法いずれにおいても他の物語との相関が高く、また全体評定との関連も強かった。加えてNaS-NaSA間での相関も有意であり、Vaugh et al.(2006)同様、これを安全基地スクリプトを測定する代表的な刺激語群と考えることができるだろう。

先行研究で見られたような内部相関が見られなかったことについて、今回得られたデータでは先行研究ほどの長さの文章が得られていない、したがって得点の分布が狭い範囲に偏る、同様に安全基地スクリプトの要素を含むと評定される物語が相対的に少なくなる、といった問題に関わることが指摘される。今回用いたオリジナルの刺激語群は子どもを持った母親を対象とした研究を通じて定められたものであり、大学生では得点が低くなりやすいとも言われているため、それもまた内部相関が認められなかった要因であるかも知れない。子どもを持った母親を対象として、長い文章を作ってもらえるような教示を工夫し、再度検討する必要があるだろう。

ところで本研究では、WatersらによるNaS法に加え、攻撃性の要素を含んだNaSA法を作成している。前者については関連する愛着尺度との間に理論的に予想される方向での相関が見られず、むしろ後者においてRQの拒絶型得点やECRの回避得点と理論的に予想される方向で負の相関が見られた。少なくとも現時点では攻撃性の要素を含めた刺激語群を用いた方が、

Watersらが安全基地スクリプトとして取り上げようとした心理学的構成概念を適切に捉えられるのではないかと思われる。

2. 関係における安全、あるいは安定した関係について

そのNaSA法に関しても、しかしながら、RQのとらわれ型得点、あるいはECRの不安得点とは正の相関を示したことは注目に値する。従来より、日本の愛着研究では、RQにおけるとらわれ型やECR等の不安得点が欧米に比べ高い割合であったり、高得点になりやすいことが観察されてきた。母子の分離場面を設定するSSPも分離への抵抗の激しさによって実施が難しいとも言われてきた(e.g., 数井・利根川, 2006)。これに関して、今回の研究で示されたように、関係への不安得点が安全基地スクリプト得点と正の相関を示すということは、むしろ日本人における安全な安定した愛着とはいくらか関係にとらわれ、他者からの分離や見捨てられに対して敏感である状態である可能性が考えられる。

さらにこの関連はRQ-GOにおいて、つまり「一般他者」に関する愛着スタイルにおいて見られた。恋人の有無はRQ-Rの自己評定とは関連してもRQ-GOにおけるそれとは無関連で愛着表象は関係特定的に構築される(Kudo, 2009)という知見と照らし合わせると、少なくとも日本においては、親密な関係を含めた抽象化された「人間関係」というものに対する敏感さを持つことが、その安定した営みにとって重要であるのかもしれない。

対人葛藤解決方略に関しては、HICIにおける強制的な方略を取ったとする得点が高い人は、NaSA法の評定が低くなり、すなわち安全基地スクリプトへのアクセスが少なく、ECRにおける不安とも負の相関($r=-.40$)を示していた(Kudo, 2009)。ここでも関係への敏感さと攻撃的でない対人葛藤方略とが関連し、それが安全基地スクリプトと関連していることが示唆されている。それらの指標は回避方略と正の相関も示す一方、統合的な方略とは関連がなく、安定した関係を築く能力やそれを可能にする安全基地スクリプトは、2者間の葛藤的な状況において争いを避け、攻撃的な

相互作用を防ぐ方向で機能していると言えるのかもしれない。

3. NaS法、NaSA法の臨床適用について

ここまでの予備的な報告では、まだ臨床的に適用するに足る十分な信頼性、妥当性が確立されたとは言えない。とはいえ、安全基地スクリプトを測定するにあたって、そこに攻撃性の要素を含めることがこの測定法の可能性を増すかもしれないこと、日本における安全な愛着や愛着の安定性を考える際には、より具体的に言えば安全基地スクリプトとしての評定基準を考える際には、人間関係における敏感さを考慮する必要があるかもしれないことは、今回の研究から示唆されることである。

今後の課題としてはNaSA法における「夕食の時間」の変更または洗練、教示の工夫、調査対象者の拡大または変更、さらに評定基準の再検討が求められる。さらに、今回は質問紙との関連を見たが、臨床的に最も有用なツールはAAIであり、その「心の一貫性」の指標である。調査開始時にはAAI評定の資格を得ていなかった第一著者も現在は有資格者となっており、今後はAAIとの関連を検討することが求められるだろう。こうした点を踏まえながら、今後本格的な検討を行ない、NaS法、NaSA法の信頼性、妥当性を確立していきたい。

<付記> 本研究は科研費(19730448)の助成を受けたものである。本研究を進めるにあたり、佐々本稚与さん・瀬浪可織さん・平野慎太郎さんの協力がありました。記して感謝します。平野さんには評定者としても協力をいただきました。特に感謝の意を表します。

注

- 1) Watersらの下で学んだ第二著者の梅村によると、この測定法に正式な名称はなく、日常的にはNarrative Assessmentと呼ばれていたとのことである。
- 2) 検討されたのは以下の刺激語である。
「赤ちゃんの朝」
pretend: 始めは「ふり(ごっこ)」としていたがふ

りとして使われるため「ふり」のみとした。

teddy bear : より一般的なぬいぐるみとした。

「病院」

タイトルを直訳すると「医者の診療所」だが、分かりやすく病院とした。

shot : 「打つ」という動詞と「注射」という名詞があるが、「打つ」では自転車ですを「打つ」などとなるため、「注射」とした。

人物名は原版のままをカタカナ表記したが、性別や関係に誤解が生じるため横に () で情報を付した。

- 3) 「ジェーンとボブのキャンプ旅行」に関しては、情緒的な刺激語が「動揺」だけであり、他に攻撃的な刺激語に置き換え可能なものがなかったため、「音」を置き換えた。

引用文献

- Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. C., Waters, E., & Wall, S. (1978). *Patterns of attachment: A psychological study of the Strange Situation*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Bartholomew, K., & Horowitz, L. M. (1991). Attachment styles among young adults: A test of a four-category model. *Journal of Personality and Social Psychology*, 61, 226-244.
- Bowlby, J. (1973). *Attachment and loss. Vol. 2: Separation: Anxiety and anger*. New York: Basic Books.
- Brennan, K. A., Clark, C. L., & Shaver, P. R. (1998). Self report measurement of adult attachment; An integrative overview. In J. A. Simpson & W. S. Rholes (Eds.), *Attachment theory and close relationships*. New York: The Guilford Press, pp.46-76.
- Coppola, G., Vaughn, B. E., Cassibba, R., & Costantini, A. (2006). The attachment script representation procedure in an Italian sample: Associations with adult attachment Interview scales and with maternal sensitivity, *Attachment & Human Development*, 8, 209-219.
- Dutton, D. G. (2002). Personality Dynamics of Intimate Abusiveness. *Journal of Psychiatric Practice*, 8, 216-228.
- Dykas, M. J., Woodhouse, S. S., Cassidy, J. and Waters, H. S. (2006). Narrative assessment of attachment representations. *Attachment & Human Development*, 8, 221-240.
- Fonagy, P. (2003). Towards a developmental understanding of violence. *British Journal of Psychiatry*, 183, 190-192.
- George, C., & Solomon, J. (1990/1996/2000). *Six-year attachment doll play classification system*. Unpublished classification manual, Mills College, Oakland, CA.
- Goldberg, S. (2000). *Attachment and Development*. London: Arnold.
- Hansburg, H. G. (1972). *Adolescent separation anxiety : A method for the study of adolescent separation problems*. Springfield: c.c. Thomas.
- Hazan, C., & Shaver, P. R. (1987). Romantic love conceptualized and an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 511-524.
- Hesse, E. (2008) . The adult attachment interview: Protocol, method of analysis, and empirical studies. In J. Cassidy, & P. R. Shaver (Eds.), *Handbook of Attachment: Theory, Research, and Clinical Applications* (second edition). New York: The Guilford Press, pp.552-598.
- Kaplan, N. (1987). *Individual differences in six-year-olds' thoughts about esparation: Predicted from attachment to mother at one year of age*. Unpublished doctoral dissertation, University of California at Berkeley.
- 加藤和夫 (1998). Bartholomewらの4分類成人愛着尺度 (RQ) の日本語版の作成 認知・体験過程研究, 7.
- 加藤司 (2003). 大学生の対人葛藤方略スタイルとパーソナリティ, 精神的健康との関連性について 社会心理学研究, 18, 78-88.
- Klagsbrun, M., & Bowlby, J. (1976). Responses to separation from parents: A clinical test for young children. *British Journal of Projective Psychology and Personality Study*, 21, 7-27.
- 数井みゆき・利根川智子 (2006). 文化とアタッチメント 数井みゆき・遠藤利彦 (編)「アタッチメント」ミネルヴァ書房 pp.223-244.
- Kudo, S. (2009). Correlations of attachment style and aggression in Japanese university students. Presented in 21th annual convention of American Psychological

- Society at San Francisco.
- Lyons-Ruth, K. (1996). Attachment relationships among children with aggressive behavior problems: The role of disorganized early attachment patterns. *Journal of Consulting & Clinical Psychology*, 64, 64-73.
- Main, M., Kaplan, N., & Cassidy, J. (1985). Security in infancy, childhood, and adulthood: A move to the level of representation. In I. Bretherton & E. Waters(Eds.), *Growing points in attachment theory and research. Monographs of the Society for Research in Child Development*, 50, 66-104.
- 中尾達馬・加藤和夫 (2004). 成人愛着スタイル尺度 (ECR) の日本語版作成の試み. *心理学研究*, 75, 154-159.
- 中尾達馬・工藤晋平 (2007). アタッチメント理論を応用した治療・介入 数井みゆき・遠藤利彦 (編)「アタッチメントと臨床領域」ミネルヴァ書房 pp. 131-165.
- Oppenheim, D. & Goldsmith, D. F. (Eds.) (2007). *Attachment theory in clinical work with children: Bridging the gap between research and practice*. New York: The Guilford Press.
- Steele, H. & Steele, M. 2008 *Clinical Applications of the Adult Attachment Interview*. New York: The Guilford Press.
- Vaughn, B. E., Verissimo, M., Coppola, G., Bost, K. K., Shin, N., McBride, B., Krzysik, L., & Korth, B. (2006). Maternal attachment script representations: Longitudinal stability and associations with stylistic features of maternal narratives. *Attachment & Human Development*, 8, 199-208.
- Wallin, D. J. (2007). *Attachment in Psychotherapy*. NY: The Guilford Press.
- Waters, E. & Waters, H. (2006). The attachment working models concept: Among other things, we build script-like representations of secure base experiences. *Attachment & Human Development*, 8, 185-197.
- Waters, H. S., Rodrigues, L. M., & Ridgeway, D. (1998). Cognitive underpinnings of narrative attachment assessment. *Journal of Experimental Child Psychology*, 71, 211-234.